



地図④ 東部戦線の状況(1944年7月22日)。東に張り出した中央軍集団戦線突出部前面には、ソ連軍4個軍集団250万人が攻撃の準備を整えていた。プッシュ元帥は防衛のため4個軍40万人を求めたが、ヒトラーは敵が正面攻撃をかけるとは信じず、むしろレンベルク経由でケーニヒスベルクに至るガリチア作戦を恐れていたので、中央軍集団からかえって兵力を割き、東部戦線装甲兵力の大半を北ウクライナ軍集団へ移した。

見てみよう(地図④へ45頁)参照。

ソ連軍は西方深く進出し、その戦線は黒海沿岸オデッサからカルパチア北斜面を通じてコロメアへ達し、そこから急に北へ曲がってコヴェル北方プリピャチ湿原のへりに届いている。そこからドイツ軍中央軍集団の戦線は東方へ四〇〇キロ突出し、オルシャ、モギレフからドニエプルを越えて五〇キロ先までいっている。この大きく突き出した戦線の後方連絡線は、プリピャチ湿原西端で早くも南から脅かされていた。

天助のように春の泥濘がこの危険をふさいでくれて、待ち望んだ休息をドイツ軍指導部に与えてくれた。これでカルパチアとプリピャチ湿原の間で脅威にさらされていた戦線を一時的にせよ安定させることができるのだ。

だが《ヴォルフスシャッツェ》と《マウアーヴァルト》に重くのしかかっている疑問があった。

泥濘期が終わったらスターリンは何をするのか？ どこで夏期攻勢をとるだろう？

これが一九四四年の重大な問題なのであった。

ヒトラーとその側近が推測した答えは間違っていた。状況の誤認に発したこの間違った答えが、命取りとなったのである。

一年半の間ヒトラーは、スターリンが南翼で決着をつけようとしているのだと認めることに逆らっていた。一年半にわたって赤軍とその増大する戦力をみくびってきたのだ。

VERBRANNT E ERDE

パウル・カレル

訳: 松谷健二
監修: 吉本隆昭

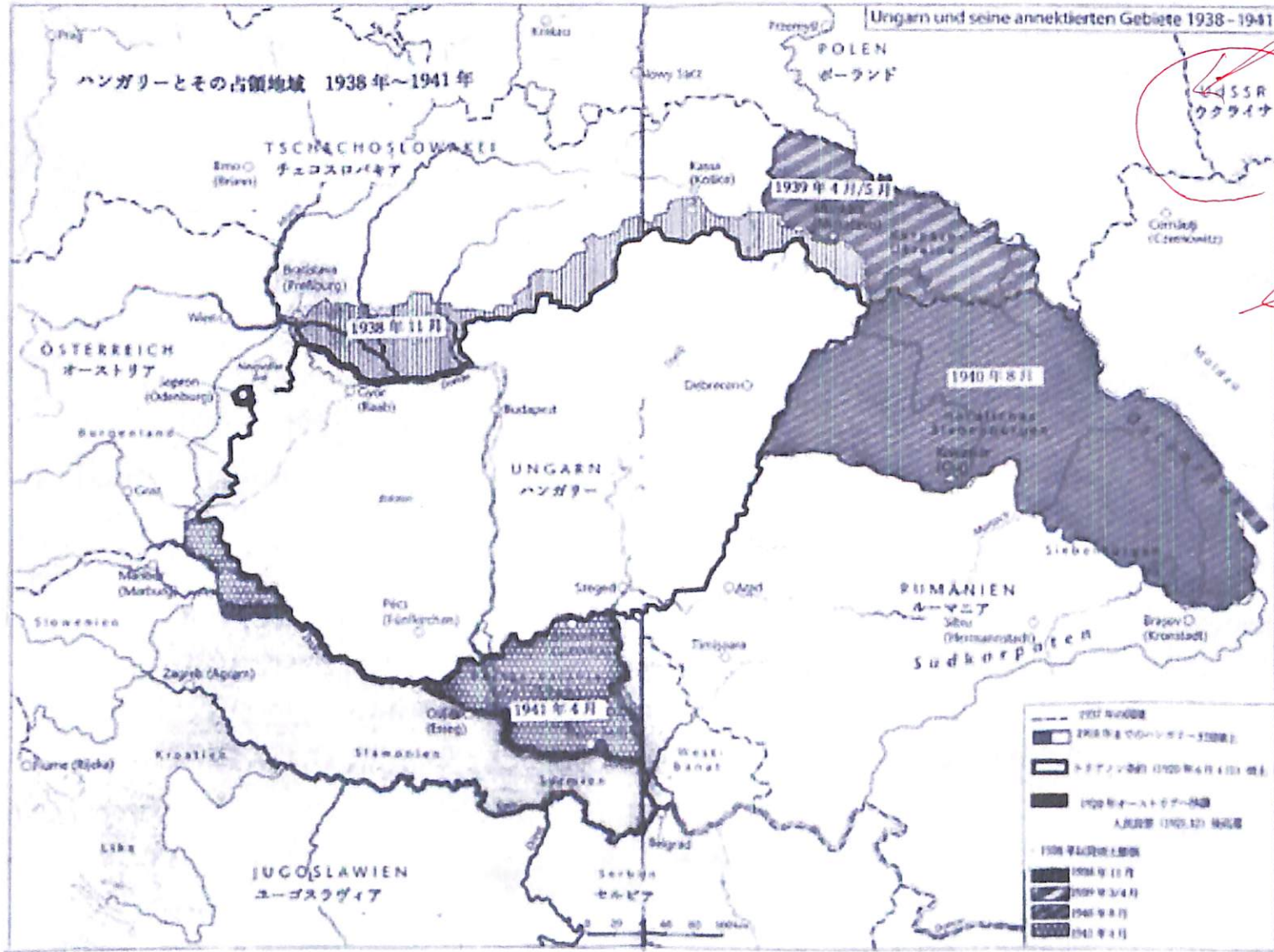
独ソ戦史

下

焦土作戦

GAKKEN
M
BUNKO

1938-41. ハンガリー領土拡大



ウクライナ
1944.
連軍

1938年11月
スロヴァキア領土
からの併合地域

1939年4月/5月
カルパト-ウクライ
ナ併合

1940年8月
北ジューベンピュル
ゲン併合

1941年4月
バチュカ地域 (中
心都市ノヴィ・サ
ド) 併合

永岑 第三帝国敗退最終局面とハンガリー・ユダヤ人の悲劇